論　文

# 善意の人　中井正一
## ―木下長宏『中井正一 ―新しい「美学」の試み―』と馬場俊明『中井正一伝説―二十一の肖像による誘惑―』を読む―

東　條　文　規

### ⑴　思想の魅力へ

中井正一を少し勉強してみよう。そう思ったのは30年以上も前、鶴見俊輔『私の地平線の上に』（潮出版社、1975年）を読んだとき。自伝的エッセイといえるこの著書で鶴見は、自らがかかわった『思想の科学』や原水爆反対運動、声なき声、ベ平連などの市民運動に触れて、「私のめざしてきたことは、中井正一の構想のなかにほとんどが入ってしまっていることを感じた」（先祖さがし）と書いていた。

鶴見が紹介する中井正一は限りなく魅力的だった。「委員会の論理」の可能性、映画やスポーツへの美学からの着目、『土曜日』や『世界文化』の活動、検挙後の沈潜と戦後の郷里尾道での図書館を拠点とした文化活動など、日本で最初の帝王切開で生まれたというエピソードまで含めて、名前でしか知らなかった中井正一をもっと知りたい、と思った。

その頃、自分なりの鶴見論をまとめたいと考えていたぼくは、その鶴見が「ほとんどが入ってしまっている」と感じた中井正一とはいったいどんな人物なのか。思想を紙に書かれたものだけではなく、態度も含めた日常の生き方と捉える鶴見の方法に共感していたぼくは、鶴見の戦争体験を軸に拙いエッセイを書いた（「鶴見俊輔覚え書き―自覚したマッセとは何か―」『四国学院大学論集』40号、1978年３月。後『図書館という軌跡』ポット出版、2009年所収）。

鶴見が否応なしに戦争に参加させられた世代だとすれば、中井は1900年生まれ。「大東亜戦争」だけでなく、後に鶴見が名付けた満洲事変（1931年）以降の「十五年戦争」にも十分自覚的に対応できた世代である。「転向」問題に興味があったぼくは、中井はその時代、どのような姿勢で過ごしたのか、知りたいと思った。鶴見が主導した『共同研究転向』全３巻（平凡社、1959年～1962年）のなかに中井正一の名はなかった（正確には中巻の「自由主義者」に名前は出てくるが直接の対象者ではない）。それに鶴見の

先の「先祖さがし」にも治安維持法違反による検挙後、警察の監視下に置かれた事実は書かれていたが、「転向」問題には触れられていなかった。むしろ、平林一「『美・批評』『世界文化』と『土曜日』―知識人と庶民の抵抗―」をはじめとする同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究―キリスト者・自由主義者の場合―』Ⅰ、Ⅱ（みすず書房、1968年～1969年）に象徴されるように、京都における反ファシズム人民戦線の抵抗の人びとの一人、その中心人物としての中井正一、というイメージを持っていた。

当時まだ美術出版社版の『中井正一全集』は第２巻と第３巻しか出ていなかったが、久野収編『美と集団の論理』（中央公論社、1962年）、『美学入門』（朝日新聞社、1975年）、『増補美学的空間』（新泉社、1977年）やてんびん社版の『生きている空間―主体的映画芸術論―』（1971年）、『論理とその実践―組織論から図書館像へ―』（1972年）、『アフォリズム』（1973年）などが出ていて専門の美学関係以外の論考もかんたんに読めるようになっていた。

鶴見論の次に中井論を書こうと決めていたぼくは、中井の考えが実践の場でどのように生かされたのか、または生かされなかったのか、もう少しいえば、中井の思想を鶴見流の思想の捉え方で考えてみようと思った。中井の文章を読めば、アカデミズムの枠内で優等生の論文を書いているだけの人には見えなかった。『土曜日』の巻頭言にしても、少し調子が良すぎると思ったが、1930年代後半という時代を考えれば、その姿勢は貴重だし、美文も魅力的だった。四国の小さな大学図書館に勤めていたぼくは、「真理がわれらを自由にする」という国立国会図書館法の前文を起草し、その創設に尽力した羽仁五郎がなぜ中井を、初代図書館長に強く推したのか。そんな興味もあって、焦点を戦後の尾道での文化活動に絞って「実践家としての中井正一」（『四国学院大学論集』44号、1979年９月、後『図書館という軌跡』所収）を書いた。

その過程で中井が1937年11月の検挙後ずっと沈黙を守っていたわけではなく、『昭徳』という司法保護協会の機関誌に「我等が信念」なる論文を書いていたことを教えられた。新泉社版の『増補美学的空間』（1977年）で、編者の鈴木正は、その解説で、「我等が信念」のなかの「東方の美しい魂」、「東方の智慧」という中井の歴史観を肯定的に紹介し、「痛苦にみちた屈辱の転向体験とそれを起点とした思索の果てに、われわれが戦後二十余年へてようやく思いめぐらすようになった一種の虚無をへた希望を、彼は直観的に悟っていたのではなかろうか。ふとそんな気がしてきた」と書いていた。

同じ頃読んだ和田洋一「灰色のユーモア」（『私の昭和史―『世界文化』のころ―』小学館、1976年所収）で和田は、検挙後の刑事や検事の取り調べ、留置所、拘置所での待遇、その後の失職、つてを求めての就職などをそれほど悲壮感を漂わせることなく綴っていた。中井正一の名前も何度か出てくるが、もともとマルクス主義者でない彼らに、転向を強要するのは無理なのだ。

「私をも含めて、誰も彼もが、特高室の中で手記をかかされ、今までは外国のあやまった思想にとらわれていたがこれからは、日本人らしい日本人になりますという誓約をし、まさしく転向を表明して、やっと執行猶予にしてもらった」。唯一永島孝雄だけは左翼活動は今後一切しないが、今までの考えは間違っていない、と主張し実刑を喰った。そして永島は獄死した（1941年）。「彼はただ、ちょっと意地をはっただけかもしれないのだ。そしてそのために獄死せねばならなかったのだ」。だが、永島以外の仲間は転向を表明した。和田はいう。

「私は転向したことになっているし、今後も転向をよそおわねばならないだろうが、しかし私はちっとも転向していない。私はただ今後数年間は、思想的な問題になるべく触れないようにして、目立たないようにそおっと生きてゆくほかはない。刑務所へもう一度はいるのは真平だし、餓え死もしたくない、当分はだまって生きていよう、そのうちに・・・（ママ）」。

和田のこの正直な告白を読んでぼくは、中井正一もおそらく和田と同じような心境だったのではないか、と思った。先の『増補美学的空間』に付された「中井正一文献誌」を見れば、転向後の文章は鈴木が紹介する「我等が信念」と「感嘆詞のある思想」（『学海』1945年３月）しか記載されていなかった。結局、この二論文を読まずにぼくは、「実践家としての中井正一」を書いた。

読まずに書くのは怠慢に違いないが、検挙前と戦後の中井の旺盛な文筆活動を見れば、７年余の間に二篇の論文しか書かなかったのは「沈黙」と見なしてもよいと思ったし、発表雑誌も大衆向けのものではない。それに、ぼくが書こうとしている中井論は、戦後の実践活動をテーマに、啓蒙家としての中井がどこまで大衆に近づけたか、生活者としての大衆に喰い込めたかに重点を置いていた。吉本隆明的にいえば、中井正一は、自分の思想のなかに大衆の原像をいかにくり込んだのか、もしくはくり込めなかったのか。もう少し言い訳をすれば、中井の尾道での文化活動を綴ったどの文章にも転向の影は見えなかった。長い沈黙のなかで醸成してきたものが、やっと開花したような明るい雰囲気があった。たしかに和田がいうように、中井正一も「しかし私はちっとも転向していない」のだった。

## ⑵ 「転向」なのか？

しばらくして10年以上も停っていた全集の第１巻と第４巻が出た。その第４巻「文化と集団の論理」（1981年）に、中井の図書館関係の著作とともに、「我等が信念」（全集では「われらが信念」になっている）が収められていた。が、もう一篇、「橋頭堡」というコラムもあった。1944年９月から翌1945年２月まで、ほぼ一週間おきに『京都日出

新聞』に連載されたもので明らかに戦争賛美の中身だった。

和田洋一は先の「灰色のユーモア」のなかで自らの転向手記について書いている。

心にないことは書きたくないが、どうせ書かないとゆるしてもらえないのだから書くほかないので、「私は今まで日本の文化を軽蔑し、徒らに外国の文化ばかりを尊重し、外国の思想を最高のものと考えてきたが、この度検挙された機会に日本の古典文化を新たに見なおし、万葉集の立派さに驚異の目をみはり、芭蕉の世界に沈潜して、自分が今まで自国の文化をいかに不当に軽視していたかを知った、私は今後は今までとうってかわって、日本人らしい日本人として生き、日本の国を立派にしていくためにつくしたい、と書き、それ以上気まりの悪いこと、例えば天皇陛下の御為、滅私奉公するとか、マルクス主義をくそみそにこきおろすとか、そういうことは書かなかった」。そしてこのあたりが和田のなかなか狡猾なところだと思うのだが、最後に「焼けぼっくいには火がつきやすい、という諺がありますが、私はまさにその焼けぼっくいであります。二度と再び左翼思想に迷わされないよう、十分気をつけるつもりであります」と付け加える。

だが、中井の「我等が信念」は、和田のこのような韜晦を明らかに越えていた。

「陛下の聴こしめすことが現つであることは、自分のすべての発言ならびに思惟が、全機を事実の前に露呈し、全歴史の前に隈もなく暴されていることが巨大なる現実であり、死(ママ)をもってあがなわなければならないほど、それが切実であることをうながす」。

「内なる耳に畏れ、心を尽すこと、誠のこころは、そのまま、陛下の御前にみずから語ることが、事実(ママ)に違反することなきかを畏るるこころである」。

ほとんど意味不明の文章である。京都学派の「世界史の哲学」や「近代の超克」的レトリックとして読めないこともないが、ぼくには当時も今も中井が和田のように、ある意味「嫌や嫌や」書いた文章には思えなかった。「橋頭堡」の文章は、そんなぼくの思いをより鮮明にした。

「一億の全体の血潮の音を、自分の体内に感ずることができることは、何という恍惚たることか」(1944年10月20日)。

「神風隊の若者たちの胸の中にはすべての神々が流し給うた涙を流しつくしての後の清らが漲っているのである。／涙に禊する心」(1944年12月14日)。

「京都府民よ、今、一人一人洗い覚めたるごとく、古都千年の意識に徹し、一人一人護国の戦士の核心たらんことをみずからに誓うべきときである」(1945年１月18日)。

『土曜日』の「巻頭言」と変わりのない文体は、より身近で具体的な事象を対象にしているだけにその分、明らかに空疎で煽情的であった。もう少しいえば、巧みな文章はあまりよくない、レトリックに満ちた美文は罪かもしれない、と思った。

それにしても、中井には和田のような狡智はなかったのか。もちろん性格や気質の違いはあるし、和田がキリスト者で、中井は浄土真宗という違いもある。ただもう一つ、

今回この小論を書くに際し、気付いたのだが、「我等が信念」、「橋頭堡」を中井が執筆した時期も重要ではないか。つまり、和田や中井が最初に転向手記を書いたのは、何度も書き直しを求められたというから1938年から1940年の間、和田の「灰色のユーモア」によれば、裁判が済んで２年半を経て保護観察所に行くと、主任から転向手記を問題にされ、「あんなもの、転向の表明でも何でもないじゃないか、君はあの中でマルクス主義の批判も何もしてないじゃないか」とつめよられ、「一しゅん寒気をもよおした」と書いているが、中井が「我等が信念」を書くのは、1941年、まだ保護監察の時期だった。とすれば、思想犯保護の中央機関の昭徳会の懸賞論文に半ば強制的に応募させられたと考えることもできる。

とはいっても、中身を読めば、生半可な気持ちで書いた文章ではない。全集第４巻の解説で鶴見俊輔は、「この巻に収められた文章は、中井正一の思想を全体として知るために、見逃すことのできない系列をなしている」として、「抵抗、転向、抵抗という三つの部分を含」んでいると書いていた。そして「中井の哲学思想を支える心情の糸が、誠意と正義感（それにおそらく日常の幸福感）であ」り、「中井正一の内部にはついに悪人はいない」と記した。

ぼくは、鶴見の「抵抗、転向、抵抗」という図式には疑問を持ったが、中井の「誠意と正義感」、それに「悪人はいない」という評価には、「そのとおり」だと思った。ぼくもまた中井論で、誠心誠意大衆のために尽くした中井正一を魅力的な人物として描いた。だが、「大衆のために尽くす」ということは、「大衆とともに」とは違うし、「大衆になる」とも異なる。中井には戦前から合理主義者としての確固たる価値感があり、その価値感は戦後の活動のなかでも揺るがなかったし、その意味では一貫として大衆を啓蒙の対象と見ていたことに変わりはなかった。だから中井の流儀は同じ啓蒙家の羽仁五郎の系列であり、戦後、地方に赴いたむのたけじやきだみのるのように、近代を相対化する視点は稀薄であった、と書いた。

したがって、全集第４巻に収録された「転向」時の論考を読んでも「書かずもがな」とは思ったが、それほど衝撃は受けなかったし、鶴見流にいうなら「まじめな人は困ったものだ」と思い、でもこの「まじめさ」が大衆にかぎりなく接近し、ぼく（ら）の共感をよぶのだろう、と思った。

### ⑶　存在論的な問い

その後も、中井に関した研究やエッセイは、「委員会の論理」やコミニュケーション論、映画やスポーツを含む美学論、それに図書館論など数多く著された。それほど熱心に、ではないが目に触れると気になって読んでみた。それぞれ「おもしろい」と共感したり、

「ちょっと違うのでは？」と疑問に思ったりしたが、こんなにいろんな展開ができるのは中井の文章の魅力だ、と思った。決して論理的に緻密なわけでなく、どちらかといえば飛躍的なところも多いのだが、それがむしろ開放的で、未来への展望を持っている。その魅力は文章のみならず、中井自身の生き方、態度を含めた思想にも反映されている。

そんな思いをより強くしたのはずっと後、木下長宏『中井正一 ―新しい「美学」の試み―』（リブロポート、1995年、後に増補版が2002年に平凡社ライブラリーの一冊として出ている）を読んだとき。木下は、戦後に書かれた『美学入門』（1951年）と『日本の美』（1952年）をていねいに読み込むことを通して中井の思想が戦時下の「転向」を媒介に深化している事実を説得力ある文章で描いていた。『美学入門』は美学を狭いアカデミズムの「美学」から解放し、「主観の崩壊を現実の出来事として認識する一個の人間の、その生きかたを問いかける書で、そのような人間として世界にどう立ち向かうかを考えようとする書物なのである」と主張していた。

そこから中井の「生きかた」に言及する。木下は、戦時下の中井の日本文化への傾倒を小林秀雄との親近性に求め、「中井正一は、より控え目なぶん、その生きかた、書くという行為に対する身構えかたはひたむきなところがあって、そのことが現実に生きるわれわれに新鮮な問いかけを投げてくれる」。ただ、「小林秀雄と中井正一の相違点の一つは、まず書くという行為に籠めた小林の執念と狡猾さを中井が持ち合わさなかったところにある」。

「中井正一は、結局自分は物を書くことしかできない人間だと自分を追い詰め切る前に、まず、啓蒙家としての自覚が大きく心を占めていたにちがいない」。

一時期小林秀雄の読者だったぼくは、木下のこの評価に共感した。たしかに中井には、小林のような執念や狡猾さ、ある種の開き直りなどはない。あるのは、「ともかく精一杯、真正直に生き、いま直面している対象に全生命を賭け全精力を傾けて生きようと」する姿勢である。

ぼくもまた「中井正一を少し勉強してみよう」と思い、中井の文章に触れるうちに、この姿勢に惹かれたのだった。とすれば、中井の戦時下の「抵抗」も「転向」も戦後の「実践」も総体としての中井正一であり、木下もいうようにことさら「抵抗の人中井正一」を強調する必要はないし、逆に「転向者中井正一」をあげつらう必要もない。木下長宏は、啓蒙家としての中井の敗北を認めつつしかし、「転向」時の深い思索と大衆との交流が『美学入門』、『日本の美』の著述に結実していく可能性を見る。

「中井正一が日本の美の一貫する特質として語った『たたきつぶすこと、打破すること、ぬけ出すこと、脱出すること、流れ新しくなること、流動するということ』は、そのまま、彼自身の生きかたを告白することにほかならなかったのである」。

「あとがき」によれば木下は、この著書の執筆を鶴見俊輔にすすめられ、いわば「青

春の整理」のつもりで書いたといい、書いたことによって、一時遠い存在になっていた中井正一があらためて「ぼく（木下＝引用者）のなかで別の相を帯びて蘇ってきた」と記した。

「それは、既成のあるいは既得の領域に自分の身を寄せ切る前に、その中に居ることへの問いを解き放つ彼の姿勢に関係がある。この中井の、存在論的問いの姿勢は、いうまでもなく最も根源的な抵抗の姿勢ではないか」。

木下のこの指摘を読んで、「ああ、これこそが中井の魅力なのだ」と、ぼくもあらためて思った。木下ほどの深い読みは出来なかったけれど、この「存在論的問いの姿勢」が時代を越えて何人もの後進に中井論を書かせるのであり、同時に書くものに対しても逆に、中井の方から同じ問いが投げかけられてくるはずである。そしてこの中井からの問いに、どのように応えられるのかが中井論の質を決定するといえるのではないだろうか。

## ⑷　「伝説」の魅力

ところで木下は、同じ「あとがき」に、この中井論を書くに際して、「資料は、印刷公表されたものだけに限ろうとした」と書いた。木下もいうように「資料を限定することは、一つの毅然たる方法論である」。そして木下はその「毅然たる方法論」によって思想家中井正一の「新しい『美学』の試み」を見事に描き出した。

だが中井はよく知られているように、美学者であると同時に啓蒙家であり、実践家でもあった。美学者としての中井。反ファシズムの活動家としての中井。地方文化運動の啓蒙家としての中井。そして国立国会図書館副館長、日本図書館協会理事長としての中井。それぞれの場で中井は全力を尽くし、52年という当時でもそれほど長くない生を閉じた。

多方面での活動と志半ばの死。それだけでもある種の物語を生む舞台は準備されている。じっさい、中井正一と同時代をともに生き、中井の周辺にいて、その魅力に直に接し、いわば中井正一という磁場に引き寄せられた人びとは何人もいた。彼（女）らは、自らの体験や経験、問題関心に惹き付けて中井の魅力を語り、書き、それがまた他の人びとに伝わる。ぼくもまた最初に触れたように鶴見の『私の地平線の上に』で中井を知ったのだった。

馬場俊明『中井正一伝説―二十一の肖像による誘惑―』（ポット出版、2009年）は、このような中井の磁場に引き寄せられた人びとの語りをていねいに集め、中井の遺族（長女、次女）をはじめ関係者の証言や未公開資料をも踏まえ、人間中井正一を描き出す。ここに「二十一の肖像」というのは、序章「まなざし」から終章「新しい神話をもとめ

て」までの全７章のなかの21節それぞれを「伝説」として記したという意味である。

さて、馬場は、「先行研究にみるような中井の思想的考察や解釈からではなく、生い立ちからの日常的な伝聞や傍証、回想などの断片的なことがらを、パズルの一片のピースのように組み合わせて肖像を描く」という方法を取っている。この方法によって従来いろんなところで語られてきた「中井伝説」と付き合っていく。

「伝説」とは何か。なぜ「伝説」に付き合うのか。馬場は「誕生してくる伝説は、きわめてうつろいやすく流動的だが、その暗黙の合意のなかの信憑性には、人間が生きていくための根本的な何かをあきらかにするまなざしが存在しているはずである」という。だから馬場は「中井伝説」を、その拠ってきたる根拠を解明し、明示して、ときには引っ剥がすというような方法は取らない。どこまでも「中井伝説」に付き合い、寄り添うことによって見えてくる「信憑性」を探っていく。

では「中井伝説」とは何か。中井の読者ならだれでも知っている、日本で最初の帝王切開で生まれたという「出生伝説」。結婚時に母親（千代）が嫁（ミチ）に説いたという「中井の友人を大切にすること、家では他人の悪口をいわぬこと」という「家訓伝説」。戦後尾道での文化活動期、中井の講演会に母親一人しか来なくなったという「聴衆０の講演会伝説」。国立国会図書館副館長就任時に松平恒雄参議院議長に語ったという「母に相談して伝説」等々。馬場は当時の資料や証言、思い出話しなど、真偽不確かなものまで含めて出来る限り収集し、それらを「パズルの一片のピースのように組み合わせて」「人間中井正一」の肖像を描き出していく。

だが、数多あるピースの一片がそんなに巧く組み合わせられるはずはない。たとえば「出生伝説」は「日本でも数例しかなかった帝王切開手術によって生まれた」と訂正すべきであるという新しい研究（藤井祐介）を紹介しながら、他方従来の「伝説」を否定することはしない。戦後の尾道での文化運動の挫折、「焼け落ちた伝説」（山代巴）に関しても、広島の『中井正一研究会会報準備号』に載った異説「『焼け落ちた』と東京行きとの間には因果関係はない」（甲斐等）にも触れてしかし、地元の人びとにとっては「突き放されたという感は否めない」として、この「伝説」の「信憑性」も否定しない。

馬場のこのような慎重な方法は、新しい資料だけでなく、従来埋もれていた資料や直接関係のないような資料にも幅広く目を注いだ成果である。たとえば、中井がせっかく入学した憧れの第三高等学校を入学直後に休学し、大阪の常見寺境内の行信教校で一時修行生活を送った事実に関連し、詳しく調査する。そして大学院時代に行信教校で講演した、その講義録の存在をつきとめる。さらに、伊藤証信との交流から証信に「信仰相談」をした大阪の一青年がじつは中井と「同一人物ではないか」と推理しているが、十分説得的で、これがまた新しい「伝説」を生むのかもしれない。

馬場は、資料を探索するだけでなく、直接中井と接した人びとやその近親者を求めて、

中井ゆかりの大阪、広島県竹原、尾道を歩く。大阪では適塾そばの緒方病院・財団法人洪庵記念会や一時中井が修行生活を送った摂津富田の行信教校、竹原では中井の菩提寺である照蓮寺、中井関係資料が保存されている市立竹原書院図書館、尾道では千光寺山の中腹にある両親が暮らした住宅。ここでは、三高時代同級の服部之総や大宅壮一などの友人が招かれ、「青々とした景色のよい海を眺め、うまい酒と千代の手厚い歓待をうけている」。

馬場俊明は、「あとがき」で、中井正一の存在を意識したのは「『土曜日』の「巻頭言」から、精神の明晰さを教えられたとき」と書き、「時代が嘘言に倦んでいるいまこそ、中井の精神の明晰さがあらためてもとめられているような気がしたので、美学や哲学の素養のない筆者だが、あえて中井と対話してみたくなったのである」と記している。ここにも、中井の「存在論的問いの姿勢」の魅力に惹かれた人がいる。

## ⑸　「恵まれた」人

ところで本書を読みながらぼくは、「人間中井正一」はいろんな苦悩や困難に遭遇しながらしかし、極めて恵まれた環境のなかで、屈折することなく、人生を肯定的に生きた、稀有な人だと思った。そしてこの環境を支えたのは、母千代の「不屈の愛」であることは中井本人も認め、馬場も本書で強調しているところである。たしかにそうには違いないのだけれども、その背後に父真一の豊かな経済力があったことが大きいし、この力を決して過少評価すべきではないだろう。

日本最初の帝王切開手術といっても、その決断よりも広島から大阪の名医（緒方正清）に依頼するには金銭的余裕が必要である。京都での高等学校、帝国大学時代の中井の奔放な「ゴンタ」振りにしても、経済的余裕のなせる技と言えないこともない。

「中井の友人を大切にすること、人の悪口を家では言わない」という「家訓伝説」をよいことに毎夜毎夜の「中井ホテル」での談論風発と宴会もほとんどすべて中井の負担であった。いうまでもなく父真一のたぶん多すぎる仕送りである。「ストップウォッチ伝説」に出てくる中井正一監督の総天然色映画「海の詩」の製作費は3600円、前衛映画「十分間の思索」は1440円。当時サラリーマンの月給約100円と馬場は記しているが、週刊朝日編『値段史年表―明治・大正・昭和―』（朝日新聞社、1988年）によれば小学校教員の初任給は45円～55円。高等文官試験に合格した高等官の初任給は75円。いずれにしても一介の学者が賄える額ではない。

「滝川事件と『中井のおっさん』」では、久野収が真下信一の言として「中井正一という大学院の大ボスがおって、これが卒業しているのに何も職がなく、ずっと遊んでおるおっさんで」と回顧談を語ったことが紹介されているが、たしかに中井正一は「ずっ

と遊んでおるおっさん」だったのである。

馬場はこの経済的問題については控え目にしか記していないが、馬場も参考にしている山代巴『千代の青春』（径書房、1996年）ではより明確である。

恩師の深田康算が酒好きだと聞くと千代は、「先生のお宅へ訪ねる弟子たちに飲んでもらって下さい」と一筆認めて、広島の銘酒「酔心」のこもかぶり（四斗樽）とつまみ用にてびら（乾しかれい）とからすみを贈る。京都の正一の家にもいつも同じ「酔心」が置いてあった。正一が検挙されたときには、千代は面会に行き、特高刑事に抗議すると同時に尾道名物の鯛の浜焼きを持参することも忘れない。敗戦後しばらくの間、中井一家の生活の糧になったのは、亡父真一が植民地朝鮮に所有していた土地を売った金であった。山代は「約束を守った」と書いているがそれにしても、敗北必然の日本人名義の土地を時価で買い戻した朝鮮人は立派である。よほど父真一は信頼されていたに違いない。

馬場もまた、中井の父は「海運業で成功し重役にもなっていたので、息子への援助を惜しむことはなかった。真一は『いつも不労所得をいただいているので、大衆に返さねばならない』といいつづけていたそうだ」と書いている。同時代の仲間真下信一が「ずっと遊んでおるおっさん」といい、同じく冨岡益五郎が自分もその恩恵に与った感謝を込めて、父親が「亡くなられるまでスネをかじっていた」と言っているのは微笑しい。

ぼくがここに中井の恵まれた経済的環境を山代の小説まで引っ張り出して書き出したのはほかでもない。「中井伝説」の少なくとも戦前までのそれは、父真一の経済的援助に多く負っていると考えるからである。そしてより重要なことは、中井が父の経済的援助を何の衒いもうしろめたさもなく極く自然に受け入れているように思えるからである。

いうまでもなく、人がどのような環境に生まれるかは偶然である。本人には何の責任もない。だがその偶然は当然その人の生涯に何らかの痕跡をとどめる。評伝や伝記を読む楽しみは、その被伝者の生まれ育った環境を知ることにもある。思想を言説だけでなく、態度も含めた日常の生き方の総体と捉えるなら、環境、なかでも経済的背景は重要だ、と考える。とくに日本の近代のように階層や階級が急激に流動的になった場合はなおさらである。

## ⑹　誠意を信じる

そのむかし『共同研究転向』を読んだとき「なるほど」と思った指摘に出会った。この本にはいっぱい教えられたのだが、「転向の共同研究について」で鶴見俊輔は、転向は生活のために仕方がなかった、と後に言い訳をする例が多いが、ほんとうは「ある特定の生活水準を維持するために」と意味付けられ、そのために同時に６つの可能性が排除されると記していた。その６つとは⑴死、⑵発狂その他の病的状態、⑶亡命、⑷投獄、

⑸転業、⑹沈黙であるという。

この指摘は鋭い、とぼくは思い、もし自分ならどういう選択をするだろうか、と考えた。どの選択も苛酷である。とくに⑴〜⑷はぼくには無理だ。小林多喜二の拷問による死、中井の先輩三木清や同僚戸坂潤の獄死、獄中18年の志賀義雄と徳田球一、同じく獄中12年の宮本顕治、自ら死を選んだり、発狂した無名の活動家たち。治安維持法下の弾圧史を少しでも勉強すれば、これら殉教者たちの真似など到底ぼくには出来ない。⑶の亡命にしても言葉もままならないし、知り合いもいない。でも、ひょっとして可能なのは⑸の転業と⑹の沈黙ではなかろうか。

石川三四郎や林達夫を読んだのもこの文章に刺激されたからだった。石川は、中井よりは一世代上の人だが、大逆事件（1910年）後の「冬の時代」を亡命に近い海外放浪と帰国後は農業を主にした自給自足的生活で貫いた。林達夫は、羽仁五郎、三木清らとともも鋭い批評家だったが、奴隷の言葉でしか語れなくなったとき、沈黙を選択した。

「絶壁の上の死の舞踊に参加するひまがあったなら、私ならばエピクロスの小さな園をせっせと耕すことに努めるであろう。これは現実逃避ではなくして生活権確保への行動第一歩なのである」（「新スコラ時代」『歴史の暮方』筑摩書房、1968年所収）。

石川は泥くさく、林はスマートに国家の罠から逃れた日本では数少ない知識人だった。林達夫は、東方社という軍の対外的宣伝のための写真雑誌『FRONT』を出していた会社の理事長になったが、先の分類からいえば、「転業」による「沈黙」だといってもよい。

ぼくは、鶴見の「転向研究」によって石川三四郎と林達夫のファンになったが、中井正一もまた、石川や林とは別の方法で、「絶壁の上の死の舞踊に参加」することを避けたのではないか、と思う。どのような方法で、といえば、父の経済的援助によって。じっさい京都日出新聞に「橋頭堡」を書くぐらいでは家族を養うことなどできない。その意味では書かずもがなの文章ではあるが、友人の父の好意を断ることが出来なかったのであろう。「我等が信念」にしても、職さがしもせず、仲間と連歌の会など開いて相変わらず「遊んでおるおっさん」を見逃してくれるほど権力は甘くない。さきにも触れたように、半ば強制的に応募させられたのであろう。

このあたりが、中井の脇の甘さ、人の好さ、無条件に他人を信じるような性格や気質によるのだろうが、これらの文章にレトリックは読めても、たとえば中野重治の鬱屈や林達夫のイロニーは見られない。どこまでも正直に正攻法に、町内の防火班長としてメガホン片手に走り回るように一所懸命なのである。ここには、人の悪意や非難からでも学ぶことができる、という視点はないし、はじめから中井にはそんな視点は準備されていなかったのであろう。だから、天皇制に対しても、その具体的な権力行使を担う警察権力に対しても憎悪や怨念などは見られないし、したがって執着心も薄い。むしろ権力の弾圧を半ば自然災害のように理不尽だけれど「仕方がない」と受け止めたようなふし

さえ見受けられる。その意味では、木下長宏がいうように、「我等が信念」や「橋頭堡」は、「まぎれもなく中井正一のまじめな文体であるし、その論旨の骨髄は、転向以前の彼が考えてきたことによって組成されており、のちのちの〔戦後の〕彼の言説と思想に蘇っている」ことは間違いない。

とすれば、『資治通鑑』を読み通し、「気一機」についての研究への沈潜は、中井にとっては、東洋や日本への回帰のポーズをとりながらじつは、新しい美学への学習期間、充電期間だったと考えることもできる。たしかに当時の権力にも後の研究者にも明らかに「転向」の一種と定義づけられるし、中井本人も「転向」した「事実」に苦悩したに違いない。だが、中井の「前のめって生きる」姿勢は、すでに戦後の時代を見据えていたのかもしれない。「このような時期、中井はときがくるのを待って、体力、気力を失せないように娘たちと朝早くからかけ足をし、身体を鍛えていたのである」（『中井正一伝説』）とはいかにも出来過ぎた話しのようであるが、中井の戦後の尾道での文化活動の早さ（1945年10月治安維持法の廃止後すぐ）を見れば、それもまた中井らしい。

それにしても、中井正一を取り巻く人びと、恩師をはじめ同僚、仲間、町内会、さらに尾道での文化運動の仲間たち、すべては善意の人びとであった。中井正一には、他人の善意しか見えなかった。より正確には、他人の善意しか見ようとしなかった、というべきであろうか。こんな「善意の人」が初めて出会ったのが、副館長として赴任した国立国会図書館の官僚機構の人びとだった。彼らは最初から中井を色眼鏡で見、もっと言えば悪意でもって遇した。この時期の中井の苦悩と葛藤は、馬場が第５章「真理がわれらを自由にする」、第６章「図書館法ついに通過せり」、終章「新しい神話をもとめて」で詳細に論じているが、中井の善意はまさに「霧の中のヨードル」だった。

ぼくは30年以上も前の中井論に次のように書いた。

「彼の情熱は本物であった。現実のあいまいさのなかでも、真剣で情熱的な誠意が誠意としてひとの魂を揺り動かさぬはずはない。というよりむしろ、現実があいまいで中途半端であればこそ、ひとは他人の超人的でひたむきな誠実さや努力に感動と共感の声をあげるのである」。

馬場俊明は、中井のこの意志的楽観主義を深いところで支えたのが仏教の救済感覚と母千代の「不屈の愛」という。もう一つ、それに父真一の「豊かな経済力」を付け加えたいと考えるぼくは、唯物論的に過ぎるだろうか。いずれにしても、中井正一を読むということは、中井の存在論的な問いに耳を澄ますことであり、それはひょっとして未来へのかすかな一条の光になるのではなかろうか。木下長宏と馬場俊明、二人の中井論を読み返しながらふと、そんな思いがよぎったのだった。

（とうじょう　ふみのり。2011年８月20日受理）